

シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて

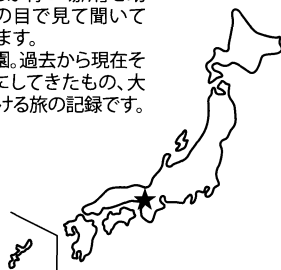
大阪市立愛珠幼稚園

大阪府大阪市



日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第1回目は愛珠幼稚園。過去から現在そして未来に向けて大切にしてきたもの、大切にしていけるものを見つける旅の記録です。



大阪の活気あるオフィス街の中に木造建築の幼稚園がある。

朝、大名屋敷などに用いられる「塀重門」という格式の高い門が大きく開かれ、子どもたちが次々に幼稚園の中に入っていった。

◆「家鳩」の歌に誘われて……

園庭から子どもたちの柔らかな声がする。子どもたちがしていたのは「家鳩」の遊びだ。

「いえはどの すのとひらきて
はなちやる ゆくえやいざこ
やまにのに しばふのはらに
あそぶらん」

という歌に合わせて、ハトになった子どもたちが、飛び立っていく。

二、三周回ったところに、次の歌になる。



「あそびてあらば かえらなん とくかえらなん かえな
ずば すのとじてん すのとじてん」

歌の終わりに合わせてつないだ手がおろされる。
つまり扉が閉じるのだ。手がおろされるまでに中に
入ろうと、子どもたちは走り込む。スリル感があつ
て楽しさが広がっている。

またやろう！ という声が上がリ、誰かが歌いだ
す。待ちかねたように走りだす子どもたち。遊ぶ楽
しさが庭中に広がっていった。



▲幼稚鳩巢戯劇之図（愛珠幼稚園所蔵）

愛珠幼稚園では、『幼
稚鳩巢戯劇之図』に描か
れている「家鳩」の遊び
を採譜し、子どもたちの
遊びの中に取り入れてい
る。過去から現在、未来
へとつないでいく保育を
大切に行っている歴史ある
幼稚園ならではの遊びが
随所に見られる。

大阪市立愛珠幼稚園が創立されたのは明治十三
年。現在の園舎は三代目にあたり、明治三四年に竣
工されたものである。現役の幼稚園園舎としては国
内で最も古い園舎である。平成十九年、日本最古の
木造園舎と廻旋滑り台が、国の重要文化財に指定さ
れ、年2回春と秋に行われる一般公開には、七百名
近い参観者が訪れるという。園内には二階建ての資
料室がある。守り残された豊富な資料が整備されて
おり、資料閲覧のために来園する研究者も多い。

園舎の特徴は大きく分けて二つ。一つは実際に保
育にあたる保母たちの原案をもとに設計がされたこ
と。もう一つは、連合町会の人たちの並々ならぬ意
気込みを背景に教育の場である園舎の建設に労力と
資金が費やされ、最高レベルの建築となったことだ
という。

愛珠幼稚園がある「北浜」という地域について、
山口加津子園長は「とにかく子どもを大事にする
という地域です。子どもを大事にするということは、
教育にお金をかける、熱意もお金もかけるといふの

が、このあたりに昔からあったのではないか」と説明された。

◆つながって流れている空気が感じられる園庭

園庭と保育室の間に廊下がある。廊下と園庭は段差がない。園庭に土を盛り、廊下と同じ高さにし、出入りの際に園児がケガをしないようにという配慮だという。



廊下に座り込んでコマ回しをしている三歳の子どもたちがいた。クルクル回るコマがうれしくて何回も回している。縁側のような空間に、日の光が暖かい。

少しして年長組の子どもたちが庭を走り始めた。三歳の子

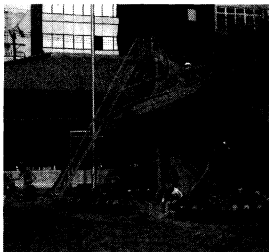


どもたちは、まだコマ回しをしている。動と静がこんなに近くにあるのに、空気は穏やかなままだ。保育室から廊下へ、そして園庭へと、つながって流れる動きがある。つながって流れている空気がある。

園庭の隅にはいろいろな遊具が置かれている。子どもたちは思い思いに遊び始めた。積み木を積んでいるうちに、背もたれのある椅子が出来上がった。「よし、座ってみよう」。そとと腰掛けると、椅子はゆらゆら揺れてこわれ、笑顔がはじける。

歴史を感じさせる木造建築に囲まれ、コの字型に区切られた空間が、落ち着いた雰囲気を醸し出している。

園舎と共に重要文化財に指定されている滑り台。滑り



台で遊ぶ子どもを見ていたら、その後ろにビルが見えた。今と昔が溶け合う毎日が、こうして積み重ねられている。

◆日本文化の中で暮らしている子どもたち

愛珠幼稚園には、「家庭室」と呼ばれている和室がある。そこでは毎月「お茶遊び」が行われるそう。数日後に作品展を控えていたこの日。美しい窓際の机の上に子どもたちが作ったお茶碗が並べられていた。向

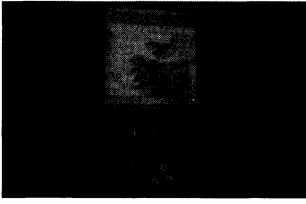
こうに見えるのは日本庭園。

床の間に掛け軸がかかっている。

明治三四年に寄贈されたもので、

『修身用季節画（庭山耕園作）』である。四季折々の子どもたちの生活を

描いた全9点の絵が、季節に応



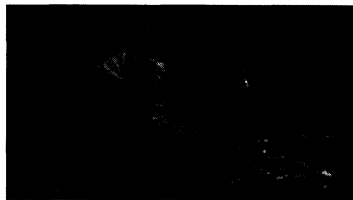
じて床の間に飾られる。

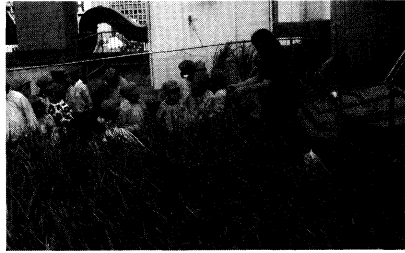
そこへ貝合わせを持って先生と子どもたちがやってきた。貝の内側に絵が描かれている。きれいに並べていた子どもたち。しばらくして、「ちよつとやってみよう」と言う声が上ががり、幾つかの貝を裏返した。「あ、あったー」「わあ、違った」その動きはすぐにみんなの中に広がって、たくさんさんの貝を使って貝合わせが始まった。

床の間があり、そこに日本画が飾られる幼稚園。日本間から庭園を見ることができる幼稚園。幼稚園の日常の中に、日本文化がしっかりと存在している。

◆町とつながり、町に守られている幼稚園

山口加津子園長先生に愛珠幼稚園に寄せる思いを尋ねると「ここまで歴史がつながってきたということは、皆さんのお陰であり、感謝の気持ちが一番





▲緒方ビル屋上で稲刈りをしているところ
(9月)

です。保護者にも、地域の方々にも、この幼稚園を作ってくださいった方々にも、感謝の気持ちでいっぱいです」という答えが返ってきた

幼稚園の鳥小屋に稲が干してあった。これはどうしたのですか？ と聞

くと、向かいにある緒方ビル（緒方洪庵の種痘館記念資料室があるビル）の屋上を借りて稲を育てて、今年収穫した稲なのだという答えが返ってきた。町とつながり、町に守られている幼稚園、それは、昔から今そして明日へと、綿々とつながっている大切な思いである。

庭の柿の木に、柿の実がたわわに実っていた。明日は収穫する日なのだという。柿は、みんなで食べるだけでなく、お世話になっている地域の人々のところに、日ごろの感謝の気持ちを込めておすそ分け

するそうだ。「柿は布で磨くとピカピカになるのよ。今年はたくさん取れそう！」そう言って笑う園長先生。

子どもたちの手で丹念に磨き上げられた柿が町の中に届けられていく。とても丁寧で心のこもった行為の向こうに「感謝」の気持ちが見えるように思えた。



◆子どもたちの声がやわらかに響く

園長先生に、この空間で暮らしているからこそ、と思われる子どもたちの姿は？ と尋ねると「四月に入園した子がいっぱい泣くじゃないですか。お母さんと離れて不安になったりして。その泣き声がキンキンしないんです。泣いている子のそばで、自分も泣きたいんだけどがまんしよう、それよりも、どうして泣いてるのかなと見守ってあげる。年長さんもどうしたの？ と穏やかに声をかけてあげられ

る、そういう雰囲気になるんです」という答えが返ってきた。それは、参観していた私自身も感じていたことだった。

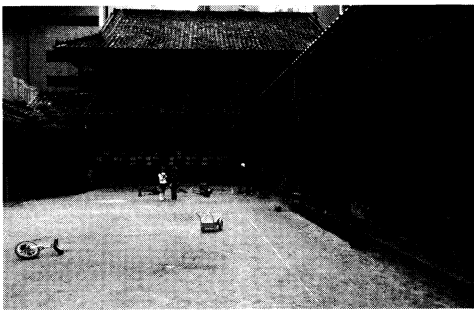
続けて「遊戯室で子どもたちが歌うと公会堂のホールで聴くよりもいい声のように私には聞こえます。音が適度に吸収されて、子どもの声が生きて聞きと聞こえます。幼稚園は適度の広さであり、空間であるように思います。また、床に腰をつけて遊んでいる子どもがいましたけれど、幼稚園の床はかなり温かみがあります。子どもたちは園舎をとても大切にしてくれます。落書きをする子がいない。子どもたちもこれまで受け継いできたものを大事にしているということが知らず知らずのうちに身につけているのだと思います」と話された。力のこもった言葉だった。

明治十三年、日本で四番目にできた幼稚園。町が作った幼稚園としては日本で最初の幼稚園。愛珠幼稚園は、今も町と共にある。愛珠幼稚園では、今も生き生きとした保育が展開されている。園舎だけで

なく保管されている教材や遊具もすべてが「現役」である。「使いながら残す」という考え方を実践している。

大切にしたい日本の心、大切にしたい日本の保育、訪問を通して確かめたのはそのことだった。

訪問者／文 宮里暁美（お茶の水女子大学附属幼稚園）



— 訪問メモ —

訪問時期：2010年10月
訪問場所：大阪市立愛珠幼稚園
〔創立〕1880（明治13）年
〔住所〕大阪府中央区今橋3-11-1
〔電話〕06-6231-0481